源氏物語評釈

第六巻

行幸　藤袴　真木柱
梅枝　藤裏葉

玉上琢彌

角川書店

源氏物語評釈　第六巻
全十四巻

昭和四十一年六月三十日　初版発行
昭和四十三年六月三十日　再版発行

定価　二〇〇〇円

著作者　玉上琢彌
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
製本者　鈴木俊一

発行所　株式会社　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話　東京（265）七二一（大代表）

Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします　旭印刷・鈴木製本

目次

凡例　一五

行幸

関戸家蔵「定家筆見遊幾帖」について　一九

一　源氏の反省　二〇
　かく思し至らぬことなく、いかでよからむことは

二　大原野行幸　二三
　そのしはすに、大原野の行幸とて、世に残る人なく

三　女の物見車　二六
　女はくはしくも見知らぬ方の事なれど

四　玉鬘の感想　二八
　西の対の姫君も立ちいでたまへり

五　帝と源氏と贈答　三五
　かうて野におはしまし着きて

六　翌日、源氏と玉鬘と贈答　四〇
　またの日、おとゞ西の対に

七　腰結を内大臣に頼む　四四
　年かへりて二月にと思す

八　大宮の病気を見舞う　四八
　今はまして、しのびやかにふるまひたまへど、行幸におとらず

九　玉鬘のことを大宮に語る　五三
御物語ども、むかし今の、取り集め聞えたまふ
十　大宮、内大臣に消息　六六
内の大殿にも、かく三条の宮に太政大臣わたりおはし
十一　内大臣、三条の宮に来訪　七二
君達いとあまたひきつれて入りたまふさま、もの〳〵しう
十二　源氏と内大臣と対面　七七
大臣も、めづらしき御対面に、むかしのこと思しいでられて
十三　玉鬘の事を内大臣に明かす　八五
そのついでに、ほのめかし出でたまひてけり、大臣、いとあはれ
十四　両大臣辞去　八九
かゝるついでなれど、中将の御ことをば、うち出でたまはず
十五　内大臣の想像　九一
おとゞ、うちつけに、いといぶかしう、心もとなうおぼえ
十六　源氏、玉鬘と夕霧に説明　九四
かく宣たまふは、二月ついたちごろなりけり
十七　大宮よりの祝儀　九七
かくてその日になりて、三条の宮より忍びやかに
十八　秋好む中宮以下の祝儀　一〇〇
中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御ぐしあげの具
十九　源氏、末摘花を嘲弄　一〇四
殿御覧じつけて、いとあさましう、例の、と思すに
二十　玉鬘の裳着の式　一一〇
内の大臣は、さしもいそがれたまふまじき御心なれど
二十一　兵部卿の宮の求婚　一一七
兵部卿の宮、今はことつけやりたまふべきとゞこほり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二十二　近江の君うらやましがる　一一九
世のひと聞きに、しばしこの事いださじ、と、せちに
二十三　内大臣、近江の君を嘲弄　一二六
おとゞ、この望みを聞きたまひて、いとはなやかに

藤袴

一　玉鬘の苦労　一三五
内侍のかみの御宮仕へのことを、誰も〳〵そゝのかしたまふ
二　尚侍任命　一四〇
はじめより、ものまめやかに心寄せきこえたまへば、もてはなれて
三　夕霧の申し入れ　一四三
そら消息をつきづきしく取り続けて、こまやかに聞えたまふ
四　玉鬘の拒否　一五二
尚侍の君やう〳〵引き入りつゝ、むつかしと思したれば
五　夕霧、源氏に報告　一五三
この宮仕へを、しぶげにこそ思ひたまへれ、宮などの
六　懸想人の失望　一六二
かくて御服など脱ぎたまひて、月立たばなほ参りたまはむ
七　柏木、父の使として来る　一六六
みづから聞えたまはむことはしも、なほつゝましければ
八　髭黒の運動　一七六
大将は、この中将は同じ右のすけなれば、常に呼びとりつゝ
九　九月の恋文くらべ　一八一
九月にもなりぬ、初霜結ぼほれ、えんなる朝に、例の

十　宮に返事　一八四
宮の御返りをぞ、いかゞ思すらむ、たゞいさゝかにて

真木柱

一　玉鬘の結婚　一八九
内に聞し召さむこともかしこし、しばし人にあまねく
二　源氏と内大臣の感想　一九二
いつしかと、わが殿に渡いたてまつらむことを思ひいそぎたまへど
三　世間と主上と　一九四
かう忍びたまふ御中らひのことなれど、おのづから、人のをかしき
四　大将と宮と兵衛の督　一九五
十一月になりぬ、神事など繁く、内侍所にもこと多かる頃
五　玉鬘の思い、源氏の思い　二〇一
女は、わらゝかにぎはゝしくもてなしたまふ本性ももて隠して
六　源氏、玉鬘を訪う　二〇三
大将のおはせぬ昼つ方渡りたまへり、女君、あやしうなやましげに
七　髭黒邸の修理　二〇八
内へ参りたまはむことを、安からぬことに大将思せど
八　髭黒の北の方　二〇九
北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひ
九　式部卿の宮の態度　二一一
式部卿の宮きこしめして、今はしか、今めかしき人を渡して
十　髭黒、北の方と語る　二一三
住まひなどのあやしうしどけなく、ものの清らもなくやつして

十一　髭黒、外出の用意　三二
暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなむと思ほす
十二　北の方、髭黒に火取の灰をかける　三二五
侍ひに人々声して、雪少しひまあり、夜は更けぬらむかし
十三　翌朝髭黒、玉鬘に消息　三三〇
夜一夜打たれ引かれ泣きまどひ明したまひて、すこしうち休み
十四　髭黒、玉鬘方にこもる　三三三
暮るれば例のいそぎ出でたまふ、御装束のことなども、めやすく
十五　髭黒の子供たち　三三五
修法などし騒げど、御もののけこちたくおこりてのゝしる
十六　式部卿の宮、北の方を迎える　三三七
父宮聞きたまひて、今は、しかかけ離れて、もて出でたまふらむ
十七　姫君、和歌を柱に残す　三四三
日も暮れ、雪降りぬべき空の気色も、心細う見ゆる夕べ
十八　女房たち別れを悲しむ　三四六
木工の君は、殿の御方の人にてとゞまるに、中将のおもと
十九　宮の大北の方の恨み言　三四八
宮には待ちとり、いみじう思したり、母北の方泣き騒ぎたまひて
二十　髭黒、宮を訪う　三五二
大将の君、かく渡りたまひにけるを聞きて、いとあやしう
二十一　髭黒の処置、紫の上の迷惑　三五八
小君達をば車に乗せて、語らひおはす、六条殿には
二十二　玉鬘参内　三六〇
かゝることどもの騒ぎに、尚侍の君の御けしきいよ〳〵
二十三　男踏歌と玉鬘　三六三
踏歌は、方々に里人参り、さま異にけに賑ははしき

二十四　髭黒、退出を催促　二六八
宿直所に居たまひて、日一日聞え暮らしたまふこと
二十五　兵部卿の宮の消息　二六八
兵部卿の宮、御前の御遊びにさぶらひたまひて
二十六　主上の渡御　二七〇
月の明きに、御かたちはいふよしなく清らにて
二十七　玉鬘の退出　二七四
大将はかく渡らせたまへるを聞きたまひて、いとゞ静心なければ
二十八　髭黒、玉鬘を自邸に入れる　二八〇
やがて今宵かの殿にと思し設けたるを、かねては許され
二十九　二月、源氏の消息　二八三
二月にもなりぬ、大殿は、さてもつれなきわざなりや
三十　玉鬘の返事　二八五
ひまに忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にも
三十一　主上の消息　二八九
内にも、ほのかに御覧ぜし御かたち有様を、心にかけ
三十二　三月、源氏の消息　二九〇
三月になりて、六条殿の御前の、藤、山吹のおもしろき夕映え
三十三　髭黒、代わって返事　二九四
御返り、こゝにはえ聞えじ、と、書きにくく思いたれば
三十四　髭黒の家族と玉鬘　二九五
かのもとの北の方は、月日隔るまゝに、あさましとものを
三十五　十一月、玉鬘、男児をうむ　二九七
その年の十一月に、いとをかしき児をさへ抱き出でたまへれば
三十六　近江の君、夕霧に言いよる　二九八
まことや、かのうちの大殿の御女の、尚侍のぞみし君も

梅枝

一　明石の姫君の裳着の準備　三〇五
　御裳着のこと思しいそぐ御心おきて、世の常ならず
二　正月の月末、薫物調合　三〇六
　正月のつごもりなれば、おほやけわたくしのどやかなる頃ほひに
三　二月十日、兵部卿の宮来訪　三一五
　きさらぎの十日、雨すこしふりて、お前ちかき紅梅さかりに
四　薫物合わせ　三三三
　このついでに、御方々のあはせたまふども、おの〳〵御使して
五　宴　遊　三三三
　月さし出でぬれば、大御酒などまゐりたまひて、昔物語など
六　裳着の式　三三八
　かくて西のおとゞに、戌の時にわたりたまふ、宮のおはします
七　東宮元服、左大臣の姫入内　三四四
　東宮の御元服は、廿よひのほどになむありける、いとおとなしく
八　明石の姫君の調度　三四七
　この御方は、昔の御とのゐ所淑景舎を改めしつらひて
九　源氏の書家評　三四九
　よろづのこと、昔にはおとりざまに、浅くなり行く世の末なれど
十　源氏の書　三五九
　例の寝殿にはなれおはしまして書きたまふ、花ざかり過ぎて
十一　兵部卿の宮と書を見あう　三六五
　兵部卿の宮渡りたまふ、と、聞ゆれば、おどろきて御直衣
十二　左衛門の督と夕霧の書　三七一
　左衛門の督は、こと〴〵しうかしこげなる筋をのみ好みて

十三　嵯峨天皇の古万葉集、醍醐天皇の古今集　三七五
今日はまた、手のことものたまひ暮らし、さまざまの継紙
十四　明石の姫君の調度の書画　三八二
またこの頃は、ただ仮字のさだめをしたまひて、世の中に
十五　雲居の雁と夕霧　三八五
内の大臣は、この御いそぎを、人の上にて聞きたまふも
十六　源氏、夕霧に教訓　三八八
大臣は、あやしう浮きたるさまかなと思しなやみて
十七　内大臣の焦慮、両人の相思　三九二
かやうなる御いさめにつきて、たはぶれにてもはかざまの心を

藤裏葉

一　夕霧と雲居の雁と内大臣の思い　三九九
御いそぎの程にも、宰相の中将はながめがちにて、ほれ〳〵しき
二　三月二十日、大宮の忌日　四〇一
上はつれなくて、うらみ解けぬ御仲なれば、ゆくりなく言ひよらむ
三　内大臣、夕霧に語りかける　四〇四
夕かけて皆かへりたまふほど、花は皆散りみだれ、霞たど〳〵しき
四　内大臣、藤の花の宴に夕霧を招く　四〇六
こゝらの年ごろの思ひのしるしにや、かの大臣も、なごりなく
五　夕霧、源氏に報告　四一〇
大臣のお前に、かくなむ、とて御覧ぜさせたまふ
六　夕霧到着　四一三
わが御方にて、心づかひいみじうけさうじて、たそがれも過ぎ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

七　内大臣、雲居の雁を夕霧に許す　四一五
月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬ程なるを
八　柏木、夕霧をみちびく　四一八
七日の夕月夜影ほのかなるに、池の鏡のどかに霞み渡れり、げに
九　夕霧と雲居の雁の語らい　四二一
男君は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとゞいつかしうぞ
十　後朝の文　四二五
御文は、なほしのびたりつるさまの心づかひにてあるを
十一　源氏、夕霧を教訓　四二七
六条の大臣も、かくと聞しめしてけり、宰相、常よりも
十二　六条の院の灌仏会　四二九
灌仏ゐてたてまつりて、御導師おそく参りければ、日くれて
十三　内大臣、夕霧に満足　四三一
宰相はしづ心なく、いよ〳〵けそうじひきつくろひて
十四　紫の上の賀茂参詣　四三三
かくて六条の院の御いそぎは、甘よ日の程なりけり
十五　祭の使の藤典侍と夕霧と贈答　四三七
近衛づかさの使は頭の中将なりけり、かの大殿にて
十六　明石の御方を姫の後見にする　四四〇
かくて、御参りは、北の方添ひたまふべきを、常に長々しう
十七　紫の上、明石の姫の入内に付き添う　四四一
その夜は、上そひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくだり
十八　紫の上、明石の御方と対面　四四四
たちかはりて参りたまふ夜、御対面あり、かくおとなびたまふ
十九　明石の御方、姫を拝して喜ぶ　四四七
いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢のこゝちして

二十　源氏、諸事に満足　四四九
上もさるべき折ふしには参りたまふ、御中らひあらまほしう
二十一　源氏、准太上天皇　四五一
明けむ年、四十になりたまふ御賀のことを、おほやけより
二十二　内大臣は太政大臣に、夕霧は中納言になる　四五三
内大臣あがりたまひて、宰相の中将、中納言になりたまひぬ
二十三　夕霧、雲居の雁の乳母と贈答　四五五
女君の大輔のめのと、六位宿世、とつぶやきしよひの事
二十四　夕霧、三条殿に移る　四五六
御いきほひまさりて、かゝる御住まひも所せければ、三条殿に
二十五　太政大臣、三条殿を訪問　四六〇
昔おはさいし御有様にも、をさ〳〵変ることなく、あたり〳〵
二十六　六条の院に行幸啓　四六二
十月の二十日あまりのほどに、六条の院に行幸あり
二十七　源氏と太政大臣と唱和　四六九
あるじの院、菊を折らせたまひて、青海波の折を思しいづ
二十八　殿上の御遊　四七二
夕風の吹きしくもみぢのいろ〳〵、こきうすき、錦をしきたる
二十九　帝と院と唱和　四七四
ものの興せちなるほどに、御前にみな御琴どもまゐれり

さしえ目次

行幸（中扉）「見遊幾帖」巻頭　（関戸家蔵）　一七
音なしの滝　（京都市左京区大原三千院の南）　二一
北野天神縁起　第三巻　「随身馬副」　二三
春日権現験記絵　第五巻　「鷹・犬・狩衣」　二三
絵入源氏物語　「そのしはすに、大原野の行幸とて」　二四
年中行事絵巻　第十五巻　「輪に押しひしがれ」　二七
桂　橋　（京都市右京区）　三〇
枕冊子絵巻　行幸の図　三二
北野天神縁起　第三巻　「やなぐひなど負ひて」　三三
をしほ山　（京都市右京区大原野）　三七
年中行事絵巻　第十七巻　「雉子一枝」　三八
春日権現験記絵　第七巻　「春日の神」　四七
隆能源氏絵　宿木㈢　「御脇息にかゝりて」　五〇
春日権現験記絵　第九巻　「腰たえぬまでかゞまり歩く」　五一
隆能源氏絵　鈴虫㈡　「直衣・指貫・下襲」　七四
紫式部日記絵巻　五島本　「集ひたまへれば」　七六
宋版史記　米沢文庫本　羽翼巳成　八二
絵入源氏物語　「六条の院も、ゑひ泣きにやうちしほれたまふ」　八七
御堂関白記　具注暦　九六
飛香舎調度　櫛の箱　九八
初音の調度　薫物の壺　一〇三

書風　上代様・鎌倉風

隆能源氏絵　柏木(一)　「御几帳の後などにて聞く女房」　一〇七

一三

藤袴（中扉）葉月物語絵巻

枕冊子絵巻　「御簾に几帳添へたる」　一三三

春日権現験記絵　第三巻　「御几帳のうしろなどにそばみあへり」　一四二

絵入源氏物語　「同じ野の露にやつるゝ藤袴」　一四五

後撰集　十三　（高松宮家本）　一四八

鹿島神宮楼門と本殿　（茨城県）　一四九

枕冊子絵巻　「大原野の行幸」　一五〇

河海抄　「手をさへて吉野の滝を」　一五五

異本狭衣物語　巻二　（鈴鹿三七氏蔵）　一六三

緒絶えの橋　（宮城県古川市）　一七四

絵入源氏物語　「読みきこゆるばかりを聞きたまふ」　一七五

一八三

真木柱（中扉）石山寺山門

石山寺と御本尊御前立　（二臂如意輪観世音菩薩）　一八七

年中行事絵巻　第十一巻　「梅宮祭」　一九一

隆能源氏絵　東屋　「御几帳にはた隠れて」　一九七

絵入源氏物語　「わが殿のうち修理ししらひて」　二〇四

隆能源氏絵　東屋　「髪いとけうらにて」　二〇九

後撰集　八　「袖の氷も解けなむ」　二一六

絵入源氏物語　「火取を取り寄せて、殿のうしろに寄りて」　二二三

目無経　「物の怪調伏」　二二七

絵入源氏物語　「慣れ来つる真木の柱」　二三九

二四五

小野雪見御幸絵巻　第三段　「御局の袖口」　二六七
後撰集　十一　（東常縁本）　二七五
絵入源氏物語　「ここのへにかすみへだてば梅の花」　二七八

梅枝（中扉）　桂宮本万葉集　三〇三
隆能源氏絵　宿木㈠　「火取」　三一五
大宮御所南庭　「お前近き紅梅」　三一七
絵入源氏物語　「はなのえにいとゞ心をしむるかな」　三一九
御溝水　三二五
下賀茂神社　下の社　（京都市左京区）　三二八
弘法大師筆『風信帖』　三五二
貫之自筆『土左日記』　仮名（草）　三五三
伝行成筆『粘葉本朗詠集』　調和体　三五三
伝道風筆『継色紙』　連綿体　三五三
西本願寺本三十六人集『貫之集』上　歌絵　三五六
平家納経　厳王品見返し　葦手　三五七
絵入源氏物語　「筆のしりくはへて、思ひめぐらしたまふ」　三六一
仮名字体表　三六三
平家納経　序品見返し絵　三六四
隆能源氏絵　夕霧　「直衣を羽織った姿」　三六六
西本願寺本三十六人集『是則集』　「みくだりばかりに」　三六八
寸松庵色紙　女手　三七〇
蓬萊切　草　三七〇
平家納経　方便品見返しと本文　葦手　三七三
平家納経　薬王品見返しと本文　葦手　三七三

寂恵本『古今和歌集』複製　大和綴　三七七
西本願寺本三十六人集　複製　粘葉装　三七七
西本願寺本三十六人集『信明佳』　切り継ぎ　三七七
寂恵本『古今和歌集』複製　大和綴　三七八
西本願寺本三十六人集『伊勢集』複製　粘葉装　三七八
平家納経　表紙・巻物・軸　三八〇

藤裏葉（中扉）　年中行事絵巻　第四巻　軟障　三九七
宝塔寺
絵入源氏物語　「花のひもとく折りにあふらむ」　四〇三
小野雪見御幸絵巻　第二段　「気色ばみよこたはれる松」　四一七
『三宝絵詞』下　東寺観智院本　四二〇
誕生仏　（東大寺蔵）　四三一
年中行事絵巻　第十一巻　「さじき」　四三五
絵入源氏物語　「紅葉の色におどろかされて」　四三八
伊勢物語絵巻　第一段　「やり水」　四五九
春日権現験記絵　「反橋」　四六五
絵入源氏物語　「鳥ひとつがひを、右の佐さゝげて」　四六七
年中行事絵巻　第十巻　「魚鳥調理」　四六八
平家公達草子　青海波　四七〇
駒競行幸絵巻　久保家本　楽所　四七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com